

戒嚴令の夜—上—

五木寛之



新潮文庫

新 潮 文 庫

戒 嚴 令 の 夜

上 卷

五 木 寛 之 著



新 潮 社 版

新潮文庫

戒嚴令の夜

上 卷

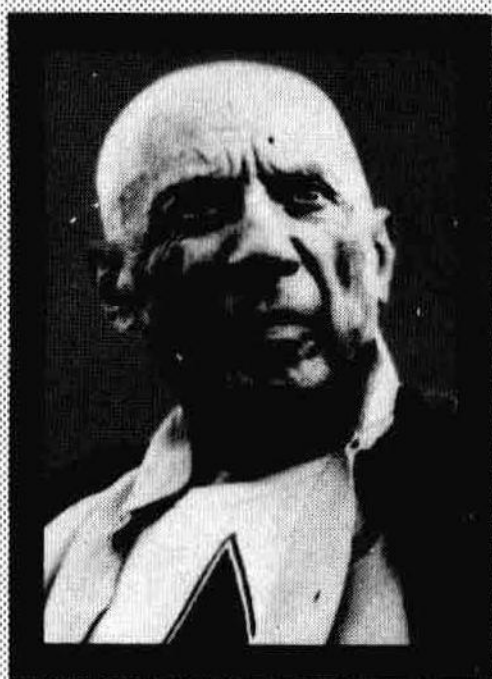
五木寛之著



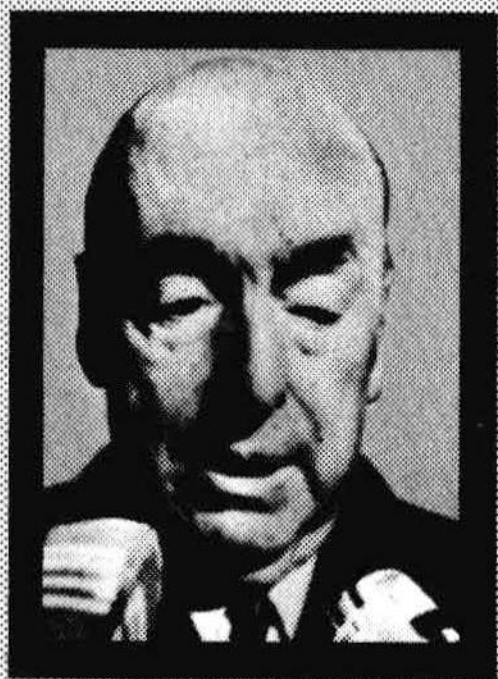
新潮社版

戒嚴令の夜
上卷

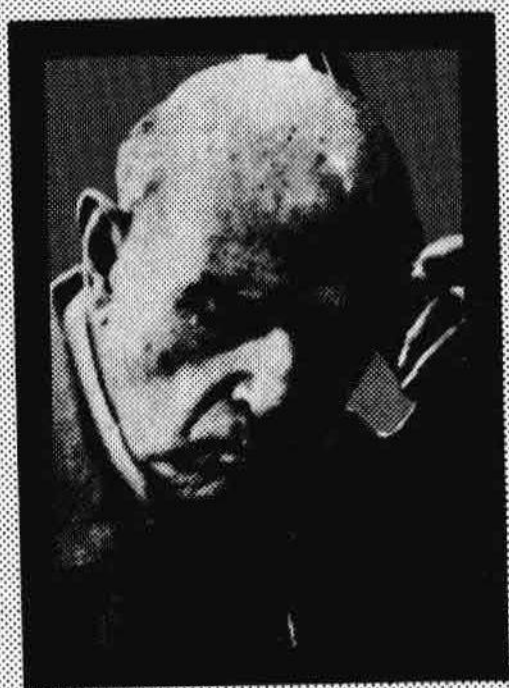
その年、四人のパブロが死んだ



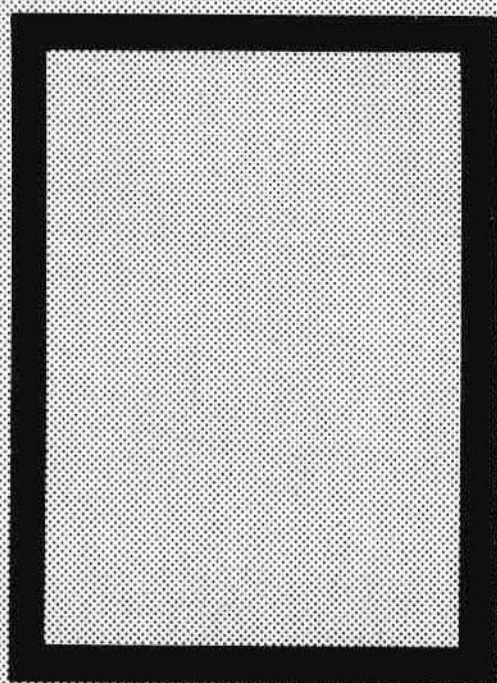
パブロ・ピカソ——1973年4月8日没



パブロ・ネルーダ—1973年9月23日没



パブロ・カザルス—1973年10月22日没



パブロ・ロベス——1973年11月3日没

第一章

如何なる折ぞ、ただいま、人のいふ事も、目に見ゆる物も、わが心のうちも、かかる事のいつぞやありしかと覚えて、いつとは思ひ出でねども、まさしくありし心ちのするは、我ばかりかく思ふにや。

「徒然草」第七十一段 より

I

その店を見たとき、突然、ヘデジャヴュンという奇妙な言葉が江間隆之の頭にうかんだ。

〈Déjà vu = 既視感^{きしかん}〉

彼が大学の学生だったころ、心理学の授業で教わった用語である。誰でも一度や二度は憶え^{おぼ}のある現象だが、全くはじめて出会う情景や人物なのに、なぜか以前に見たことがあるような気がしてならない場合があるものだ。その錯覚をヘデジャヴュンという。時には〈既視体験〉と訳される場合もある。

いま、なまあたにかい五月の夜の中で、彼が体験しつつあるのが、それだった。それも漠然とした印象ではない。くつきりとした、つよい既視感だ。

彼は一軒の酒場の前に立っていた。それはこの界隈には似つかわしくない店だった。古風な洋館のつくりで、壁には一面に緑色の蔦がからんでいる。錆びた鉄で枠どりの木製の扉。その扉のうえにうちつけてある絵葉書大のプレート。酒場・ベラ、という宋朝体の文字が、かろうじて読みとれた。目立つネオンサインも、立看板もない。ただ建物の左上方に固定された照明燈が、オレンジ色の暈のようなスポットを入口の煉瓦敷におとしているだけだ。

時代にとりのこされたような、旧式の酒場だった。だが、一九三〇年代風の流行がもてはやされる最近では、これを逆に斬新に感じる連中がいまいとは言えまい。しかし、どう見てもそれは若者向きの店ではなかった。ひよっとすると限られたメンバーだけの贅沢な店ではないか、という感じもする。おかしいことだ、と、彼は考えた。

戒 厳 令 の 夜
へおれは、この店を知っている。そして、きつとこの木の扉を押して、なかへはいってゆく

↓
江間は釘づけにされたようにその場に突っ立ったまま、あたりを見回した。

右側にはガラスばりのひよる長いビルがあり、スナックや酒場の看板が目白押しにらんでいた。左側の建物は、和洋折衷のつくりのステーキ・ハウスだった。そして、さらにこの界隈全体に、喫茶店、キャバレー、映画館、パチンコ店、小料理屋、トルコ風呂、会員制高級クラブ、カウター・バーなどの各種の店が、騒音と人工照明の渦の中に密集している。活気にみちたその光景には、どことなく露出した内臓がなまなましく光りながら息づいているような気配があった。

福岡市を二つに区切つて流れる那珂川の、その狭い中洲の上にあるこの一劃は、飲食店、風俗営業の店の数だけで、千数百軒をかぞえる繁華街である。住民二千数百名のこの街が、夜になると七万人以上の群衆を呑みこんで、錦蛇の腹のように膨れあがるのだ。その沸きたつような熱気の底に、この酒場だけが眠つたようにひっそりと押し黙っていた。彼はその店のそよとも動かない蔦の葉の重なりの間から、無言の悪意のようなものがじわじわと滲みだしてきて、自分からまりついてくるような気がした。

へこれから起ることが、おれには判るような気がする。おれがこの店にはいつてゆく。すると、まっ白なシャツに蝶タイを結んだ初老のバーテンダーがいる。そして、いらっしゃいませ、とかすれた声でおれに言う——デジャヴだ。こいつは心理的な錯覚にすぎない。おれは疲れているのだ。

彼は、首の根元を、にぎりこぶしで二、三度かるく叩いた。それから扉の前の煉瓦敷になげかけられているオレンジ色の光の暈の中へ、惹き入れられるようにはいりこんでいった。

扉には鉄の輪が下っていた。彼はそれを持ちあげてノックした。だが、返事はなかった。彼が扉を両手で押すと、木の扉は思いがけない軽さで音もなく開いた。

彼は扉をうしろ手にしめ、まっすぐ正面のカウンターのほうへ歩いていった。左右に四つほど、木造りのテーブル席がある。古風な暖炉と、鑄鉄の照明具。ほかに客の姿はない。

蝶ネクタイの初老のバーテンダーは、どこにも見当らなかった。彼はほっとして、人気のないカウンターに腰をおろした。磨きこまれた年代もののカウンターには、ちゃんと真鍮のバーがついていた。

へやはり錯覚だった。このところこんなことがよく起る。よくない兆候だ。

彼は夢からさめたような気分で、肩の力をぬき、上衣の内ポケットから煙草の袋をとりだした。そのとき、不意に、またさっきの奇妙な既視感がもどってきた。

頭のうしろに火照るような感じがある。誰かにじっと注視されているような、むずがゆい感覚だ。

へおれがうしろをふり返る。すると壁に一枚の絵がかかっている——きっとそうだ。

彼は体をかたくして、背後をふり返りたいという奇妙な誘惑とたたかった。うしろを見て絵があったとしたら、それが一体どうしたというのだ。そんなことがあるはずがない。これは単なるデジャヴにすぎない。それに、酒場の壁に絵が掛けられていること自体は、ありふれたことだ。このどこか古風などっしりしたつくりの店なら——そうだ、さしずめ十八世紀のスペイン絵画あたりが似合いだろう。

戒 厳 令 の 夜
へゴヤか？ いやそうじゃない。ゴヤはつよすぎる。もっと平凡で、温厚な静物画かなにかだ。たとえば——

彼は頭の奥に何点かの絵を思いうかべた。

へメレンデス——そうだ、この店にはあの辺がちょうどいい。

ルイス・エウヘニオ・メレンデス。ナポリに生れ、フランス絵画の影響をうけた花卉、静物画の名手である。その画家はヘスペインのシャルダンと称された。ルーブル美術館にも、その作品は展示されている。江間は目を閉じて、その絵を思い描いた。

一枚の木のテーブルの上におかれた分厚い鮭の切身。銅の食器と、レモンが一箇。

へあれはなんという題がついていただろう？ 『鮭とレモンと壺』。たしかそうだった。

彼は自分の記憶力に満足して微笑した。そして、もしおれがあんな厄介な事件にまきこまれていなければ、と、ふと思った。そうだったとすれば、そろそろ四十に手がとどくといういい年をして、九州くんだりまで取材で飛び回ったりすることもなかったにちがいない。たぶん一流とまではいかずとも、一応は大学と名のつく場所で西洋美術史の講座ぐらゐは持てたはずだ。おれが大学で美術史を専攻し、さらにスペイン絵画を研究するつもりで大学院の修士課程に進んだのも、そのためだったのに。

大した世俗的な成功は望まないが、四十歳ぐらいまでに自分の名前で、スペインの現代絵画に關する本を一冊だけ持ちたいというのが、学生時代からの彼のひそかな夢だった。

かつて彼はそのため、スペイン語の個人教授に通ったものだった。大学三年の夏には、チャーター機の割引き運賃を利用して三週間のイベリア半島旅行もはたしていた。そのための費用は、深夜の地下鉄工事のはげしい労働でまかになった。高校時代、サッカー部で「犀」^きという仇名^{あだな}でよばれていた彼の、小柄だが頑強な体力がそれに役立った。

音楽や本を、食物とおなじように必要とする人間がいるものだ。それと同じように、彼は少年のころから絵や、彫刻や、建築を、自分になくしてはならないもののように感じていた。それでいて、自分の才能がそれらのものを創り出すことよりも、それを味わい、内側に隠された魅力を発見し、それについて適確に語ることのほうに向いていることに、早くから気付いてはいたのだ。それはいくぶん淋しい気持ではあったが、彼はもともと自分が人生において主役をつとめるタイプの人間だとは思っていなかった。たとえ単なるディレクターといわれようが、知的俗物と輕

んじられようが、自分は自分だ、と割りきっていたのである。好きな絵を見て、ひとりだけの飲みにひたり、それについて喋^{しゃべ}ったり書いたりして生活してゆけたら、それで充分だと考えていた。そういった彼の生活設計が思いどおりにゆかなかったのは、必ずしも彼だけの責任ではない。

彼は大学院に在学中、仲間誘われて軽い気持で参加したデモで、私服の警官に重傷をおわせ、現行犯で逮捕されている。投石中の彼の腕をねじりあげようとした刑事から逃れるため抵抗した際に、突きとばした相手が、運わるく舗道の縁石^{ちい}で後頭部を打ったのだ。新聞社が撮影した写真には、前のめりに両手をつきだした彼の顔と、のけぞって倒れかかった男の姿が、はっきり写っていた。その警官は脳波に異常が認められ、後遺症のおそれがあると警察側では主張した。

救援団体からの弁護活動の申出を、彼はことわった。そして、そのデモ自体が無届の違法のものであったせいもあり、公務執行妨害と傷害の併合罪で禁固六カ月執行猶予三年の刑を言いわたされた。彼は控訴しなかった。それが二十五歳の夏だった。

彼はその事件のあと、大学院にはもどらなかつた。一時、うつ状態がつづいて、精神病院に入院した時期もある。

彼はその後、いくつかの仕事を転々とし、四年ほど前に現在の職場にもぐりこんだ。〈映画旬報〉という、月二回発行の映画雑誌だった。公務執行妨害・傷害の前歴があり、すでに三十歳をすぎた中年男の彼が運よく採用されたのは、入社テストの際に書かされた映画批評が、応募者の中できわだって長文だったせいだろう。彼はあたえられた一時間のうちに、二つの文章を提出した。〈記録映画・ピカソ——創造の秘密〉評と、〈ヘアンダルシアの犬〉をめぐってのルイス・ブニュエル論である。

そこは彼にとって生活のための職場ではあったが、まんざら興味のない仕事でもなかった。すでに美術は、彼にとって過去の恋人のように感じられていた。小雑誌社の仕事は相当なハードワークにもかかわらず、給与はどうやら取材費の水増しで食っていける程度のものに過ぎない。やがて彼は入社三年目に、取材で知りあった娘と結婚した。映画会社の宣伝部で、広告のコピーを書いている二十五歳の女である。彼女の給料も決して高くはなかったが、それでも二人分をあわせる人並みの生活が可能になった。彼女の実家の援助で、比較的良好なアパートにも入居できた。それから二年が過ぎている。彼はいま、ごくありふれた三十七歳の映画ジャーナリストだった。しかし半年ほど前から、彼はふたたび以前のあの理由のないうつ状態が訪れてきそうな予感におびやかされていた。

彼はその心理的な圧迫感からのがれようとして、ヨガに凝ったり、酒や、麻雀に熱中したりした。だが、ギャンブルも、アルコールも彼の虚脱感をみたしてはくれなかった。

「おれに必要なのは、やはりあれなのだろうか」

彼は自分がふたたび絵画を眺めたり、それについて考えたり、解説や感想をノートに書きつけたりしたいという強い欲望につきうごかされていることに気づいていた。だが、彼はそれを頑固に黙殺していた。彼は自分の中にある、そういった傾向が、おそろしかったのである。

「もし絵の世界へ後戻りしていったなら、おれは今の職場を投げだしてしまうかもしれない」

はるかに年下の女房に家計を背おわせて、自分はアパートで美術書をめくっているような生活。電車賃をねだっては、都内の美術館を回って歩く毎日。

「それはいやだ」